

「松山ロシア物語」の反響を最も受けたのは祥宗寺だった。

日ごろからよく顔を出す総代は、なぜ黙っていたのか、と不満をこぼし、絵を壁から切り取って、寺の宝物館に展示すればいいと口をはさんだ。幸い倉沢に貸し出しているのと同じ写真が寺にもう一つあり、好奇心から、「ナターシャ」を見にやってくる人たちのために住職は本堂の入り口に写真を架けた。県の歴史民俗資料館からは、学芸員が写真屋と一緒にやって来た。郷土史家を名乗る人や歴史の教師も何人か「ナターシャ」を見にきて、口々にもっともらしい講釈を住職にたれて帰っていった。が、つまるところ、かれらの意見を集約すれば、ロシア人将校の望郷の思いが「ナターシャ」にこめられているということであった。

倉沢は祥宗寺の住職から電話でこのような話を聞かされた日も、新聞社から届けられた読者の手紙やファクシミリの伝文などを読んでいた。直接作家の元へ届くのも含め、前回より数段多い情報が寄せられたものの、めばしいものはない。いささか落胆していたところ、その日の午後になって匿名の封書が届いた。写真在中とある。封書から取り出したセピア色の写真を目にし、作家は「おっ」と声をあげた。書き慣れた字で、便箋一枚に短く写真の説明がある。

「高野所長とソローキンが密談に使った教会というのは、当時、松山の一番町にあった聖ハリスト教会ではないでしょうか。

松山収容所が閉鎖された後、このロシア正教の教会は東京へ移転しましたが、この教会の鈴木九八牧師が、熱心な信者だった曾祖父へ二枚の写真を残しております。一枚は、聖ハリスト教会の建物です。そしてもう一枚は、ミッションの女子学生たちの慰問演奏会の記念写真です。ご参考になればと思い、ご覧いただくことにしました。

長髪を肩まで伸ばし、胸に十字架を架けておりますのが鈴木九八、袴姿の女子学生たちの真ん中の女性が武田ゆいのようなようです。女子学生たちの後に正装したロシアの青年将校が並んで立っていますが、先生が新聞にお書きになっているとおりであれば、この将校たちの中にきっとソローキンがいるものと思われま



挿絵 (S. Nanishi)

おもむろに作家は数えてみた。女子学生は十二人、将校は八人である。学生たちはみんな丸ぼったい顔を緊張させ、肩を寄せあうように立っている。背後の将校は背丈も彼女たちの倍くらいありそうで、みんな堂々とした体躯である。

撮影場所は祥宗寺の境内のようだ。土塀の屋根瓦が将校たちの背景に写っている。そして、ゆいは生徒たちの中で、ひときわ目鼻だちのくっきりとした顔をカメラのほうへ向けていた。ひつつめ髪の広い額と強い視線。思ったとおりの女性である。作家は天眼鏡に浮かぶゆいを見つめて、物思いにふけていた。それからかれはミッション・スクールへ電話をいれた。

雅子に写真を見せたかった。事務員が応答に出て、彼女は二日前から休暇をとり神戸に帰っているという。受話器を置きながら作家は自分も動いてみようかと決心した。

夜の十一時。

ミルスキーらの一行が祥宗寺を逃亡した時間に、倉沢は心配顔の妻に見送られて家を出発した。行き先は郡中の「景浜館」である。三十キロほどの山道が続く。さすがに着流しはやめて股引の上にジャージをはき、足元は運動靴にした。上は防寒用のヤッケと厚手のセーターで寒さに備えた。

四国山地を越えて高知へ至る国道を西へおれ、県道をしばらく歩き、砥部の山中へ入ったのは深夜の一時すぎであった。町の明かりで仄かに見えていた路面が暗やみの中に消え、シイやクヌギの森とスギやヒノキの林が倉沢の行く手に黒い塊になって立ちふさがっている。かれは懐中電灯を握り締め、黙々と歩いた。森や林が途切れると、白い月の光にぬれた丘陵が倉沢の眼前にひろがり、それはかれが夜のシベリアで見た雪原を連想させた。

ソロキンとゆいが待ちあわせたお堂もこのあたりだろうか。かれは目にとまった作業小屋の床に腰を落とし、体を休めた。

かつてこげつくような望郷の思いの中で見つめていた月が、中空にかかっている。

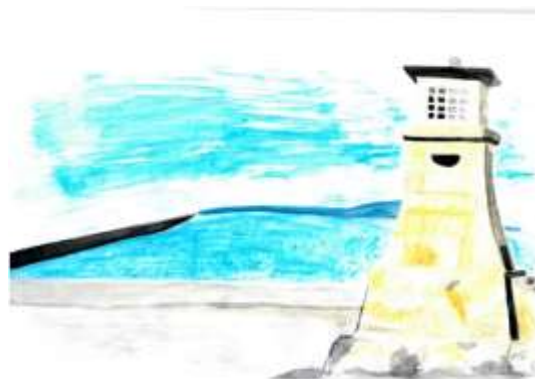
倉沢の中で抑圧してきた「シベリア帰り」の思いがぐっと頭をもたげた。五十年前に、若者だった自分もかりだされた戦争の悲惨な思い出がよぎる。そして、もうあんなことはこりごりだという思いの先に、だからこそロシア人墓地の謎に秘められた若い男女の国境を越えた愛や信頼の存在を読者に伝えたいという願いがあった。目を閉じると、手を取りあってシベリアの雪原を駆けるゆいとソロキンの姿が浮かんだ。

再び歩きだした倉沢は東の空が明るみ始めたころ、潮の匂いをかいだ。

二人が歩いた松林の端に白い壁面の「景浜館」が見えた。

来客を告げるフロントからの電話で倉沢は目が覚めた。

「神田さまとおっしゃる方がお見えです」



挿絵 (M. Tasaka)

とフロントがいう。

腕時計を見た。朝の十時過ぎである。

一瞬、何かの間違いだと思った。いそいで身支度をし、ロビーへおりた。すると、倉沢を認めてソファからジーンズ姿の女がすっと立ち上がった。雅子だった。何が起こったのか、事情が飲みこめないでいる作家を彼女は懐かしそうに見つめ微笑した。

「神戸に帰っている、と聞いていたのだが」

作家はまだ夢見ごちである。

「今朝、こちらに帰りました。景浜館だとお聞きして、それで急いでやってきました」

雅子は説明し、疲れているのに起こして申し訳ないと詫びをいい、

「先生、ナターシャが語ってくれました」と大きな目を輝かせたのである。

それは彼女が神戸に発つ前の日のことだという。

放課後、ハンドベルの練習に来た生徒たちが雅子から聞かせられていた「ナターシャ」を眺めながら色々推理をめぐらせた

生徒たちはもっとよく見たいから絵を壁からはずしてくれと雅子に頼む。それで雅子は絵を壁からはずし、テーブルへ置いた。数人の生徒たちが輪になって、絵を覗き込む。と、その内の一人が「あれー」と声をあげ、指で「ナターシャ」の髪をなぞり始めたのである。

「先生これがその時、写真部の生徒が撮ったナターシャなんです。髪の部分に注意してご覧になってください」

雅子は旅行鞆から絵の写真を取り出し、上下を逆にして作家の方へ差し出した。ナターシャの頭頂部から頸を経て肩に流れる髪が逆さになっている。

「こうして、肩の部分から鉛筆の線をたどってみます。」

雅子のつやのいい指が、髪の色をゆっくりとたどり始めた。

「アルファベットなんですよ。ほら、ここがY、そしてU、それからI…」

雅子の指はすらすら動いて、YUI、SOROKIN、AKASHIと十六のアルファベットをナターシャの頭髪から拾いあげたのである。

倉沢はいまにも駆けだし、祥宗寺の壁画を見つめたい思いにかられた。ナターシャはソロキンが後世の人たちに残したメッセージに他ならなかった。これほどドラマチックな物証はない。

雅子は彫の深い顔をあげた。

「わたし、母の方の親戚筋を訪ねて回りました」

「他に何か、わかりましたか」

「はい」

と返事をしたものの雅子は何も明かさず、作家から視線をはずした。ナター

シャの写真を旅行鞆にしまい、再び顔をあげた。

「ゆいの甥にあたる方がこの郡中にいらっしゃることがわかりました。九十二歳になられるそうです。とてもお元気でわたしに会ってくださることになりました」

「そうか、それは私もぜひお会いしたい」

もともとゆいの実家の武田家に係わる人たちを探すことが郡中に来た目的であった。ナターシャの髪のアルフアベットといい、作家が書こうとしていることの裏付けを雅子が的確に取っている。

景浜館から翁の待つ家に雅子の車で出かけた。

ハンドルを握りながら、

「今度のことで、わたし、先生に感謝しています」

雅子はいった。

前方におだやかな海面がひろがっている。

「あなたに、よかったことなのかどうか」

「ゆい、百合野、綾野、そして雅子と血が流れ、時がめぐってきたのです」

「ソローキンとゆいの間でできた子が百合野か。いい名前だ」

作家は感慨深かげにつぶやき、二度三度ソローキンの娘の名を口にした。

車は松林を右におれ、旧街道の方へ向かう。

しかし、ソローキンは愛しい女が産んだわが娘をついに見ることはなかった。

「ゆいの名前が神戸女学院の職員録にありました。明治三十九年から昭和十年まで、ゆいは母校の中等部で英語の教師をしながら百合野を育て嫁がせています。そして、昭和十一年に郷里の母に死後のことを頼んだ手紙を出して間もなく、六甲の近くのサトリウムで五十六歳で死にました」

「故郷には一度も帰らなかったのか……」

「神戸で、ずっとソローキンの帰りを待っていたんですね」

車は古い商家の並ぶ街道をゆるゆると進んだ。

「明治の女性だ」

作家は一人ごち、二人は流れる町並みを眺め沈黙した。

番地を頼りに探しあてたのは商家だった。二階の南に面した和室で翁は雅子を待っていた。

筆談で話を交わした。

驚くべきことにゆいの墓は祥宗寺にあるという。ゆいの頼みを受け入れ、武田家が小さな墓所を祥宗寺に作ったのだという。

ゆいが所有していたソローキンの写真もあった。

倉沢が手に入れた慰問演奏会の記念写真と並べて見る。

雅子が、あっと小さく声をあげた。

ソローキン少尉はゆいのすぐ後に立っていた。

夕刻、家に帰った倉沢はカザノフからの分厚い便りに目を落としていた。それから書斎にこもり新聞に連載する第三回目の原稿を書いた。